

『衛星、船着場、または新しい軌跡』

香織 1、2、3

次郎 1、2、3

秀人 1、2、3

省吾 1、2、3

由佳 1、2、3

橋本 1、2、3

吉田 1、2 (1階-2階の吉田は同じ人物)

紀子 1 (1階-3階の紀子は同じ人物)

光希 1 (1階-3階の光希は同じ人物)

受付 1、2、3 (場内アナウンスも担当)

係員 a、A、 α

係員 b、B、 β

係員 c、C、 γ

その他、観客たち

※ それぞれ、1は1階にいる人物、2は2階にいる人物、3は3階にいる人物

※ 各階によって、人物間の関係性が異なるが、基本的に同一名称は一人の人物が兼任

福島市にある、公営ギャンブルの場外券売場3つが一緒に入った建物

1階-サテライト福島 (競輪)、受付、トイレ、喫煙所、食堂、静養室、お客様相談室

2階-ボートピア福島 (競艇)、受付、トイレ、喫煙所

3階-ニュートラック福島 (競馬)、受付、トイレ、喫煙所、展望テラス

part 1 : 1階・サテライト福島

平日の午後。客足はまばら。

壁に備え付けられた、または天井から吊るされた多数のモニターを見つめている観客たち。

観客たち「お、きた」「まくれー！」「ありゃダメだ」「そのまま。そのまま！」「出てくんな！」

モニターの向こうで、レースが終わる。

観客たち…投票権を破る・喫煙所にタバコを吸いに行く・椅子に座って新聞を覗き込む・次のレースのマークシートを記入する。等々。

係員 a、b、c が場内を巡回している。

手足の不自由な次郎 1 の代わりに、香織 1 がマークシートに記入している。

次郎 1 「2」

香織 1 「2 ですね？」

次郎 1 「あと 7」

香織 1 「7。はい、7。2 と 7」

次郎 1 「…あとひとつだけか？」

香織 1 「ええ。三連単っていうのなんで」

次郎 1 「あとひとつか…」

香織 1 「やっぱり、二つのにしときます？」

次郎 1 「いや。あとひとつ。あとひとつ。あとひとつなあ…」

場内へ入ってくる紀子 1、光希 1。

紀子 1 「1階はいわきなんだ」

光希 1 「(案内見て) えーっと、2階が常滑で。盛岡が3階」

紀子 1 「常滑ってどこ？」

光希 1 「(案内見て) 愛知だって」

紀子 1 「東北だけじゃないんだ」

光希 1 「そうみたい」

紀子 1 「…なんか、すいてるね」

光希 1 「こんなもんなんじゃないの？ よく知らないけど」

紀子 1 「もっと騒がしいところかと思ってた」

光希1 「レース始まれば、うるさくなるかもよ」

紀子1 「音じゃなくて、空気。…ここの空気は、ずっと静かなままじゃないかな」

光希1 「空気？ 雰囲気みたいなこと？」

紀子1 「…ちょっと違うけど、まあそんなもん」

光希1 「ここ、静かかなあ…」

紀子1 「…教会みたいなところ」

紀子1 と光希1、場内を見て回る。

レースの確定が出て、払い戻しが始まる。

受付1（場内アナウンス）「いわき競輪第10レース。的中券の払い戻しは、自動券売機にて行えます。当施設では自動券売機以外での払い戻しは行っておりませんので、ご了承ください。また、払い戻しの期限は、レースの着順確定後、60日までとなっております」

省吾1、壁際にある自動券売機で、的中券の払い戻しをする。

札を数ながら、椅子に座っている由佳1のもとへ。由佳1に札を渡そうとする。

由佳1 「なに？ いらない」

省吾1 「遠慮するなよ。どうせ身につかない金なんだから」

由佳1 「…ここで一日潰すなんて思ってなかった」

省吾1 「仕方ないだろ。当たるんだから」

由佳1 「負けたら負けたで、もう一回って言うんでしょ」

省吾1 「違うよ」

由佳1 「ホントに？」

省吾1 「お前も見てたろ？ 当たり続けてさ。結局一回も外してない。これはすごいことだよ」

由佳1 「さっさと負ければいいのに」

喫煙所でタバコを吸っている吉田1と橋本1。

橋本1 「…タトゥー彫るわ」

吉田1 「…は？」

橋本1 「なんか、いま決めたわ」

吉田1 「いま？」

橋本1 「うん。たったいま」

吉田1 「なに？ オンナの名前でも入れんの？」

橋本 1 「13 って、数字彫るわ。(肩を示して) ここに」

吉田 1 「…なんで？」

橋本 1 「いま、気づいたんだわ。俺はその数字に支配されてる」

省吾 1 「自分でもびっくりしてるんだ。毎回、思いついた数字を書いて、その通りになる。

…こんなこと、一生に一度かもしれない」

由佳 1 「こんなことに運使っちゃって」

省吾 1 「それはない」

由佳 1 「なんで言い切れるの？」

省吾 1 「理屈に合わないから」

由佳 1 「どういうこと？」

省吾 1 「そもそも運っていうのはね。機会ごとに生じるものなんだ。次回に繰越できない」

由佳 1 「なに？ その屁理屈？」

省吾 1 「大数の法則によればそうなるんだ」

由佳 1 「なにそれ？ 占い？ 四柱推命みたいななの？」

省吾 1 「違うよ。数学だよ。確率論だ」

次郎 1 と香織 1 のもとへ、秀人 1 がやってくる。

秀人 1 「あれ？ まだ決まんないの？」

香織 1 「ごめんなさい。わたしが決められなくて」

秀人 1 「あれ？ じいちゃんどうしたの？」

香織 1 「おじいさんに頼まれてるんです」

次郎 1 「この子はね、どうも運持ってるような気がしてね」

秀人 1 「いやいや。だとしても、じいちゃんのために運使わせちゃダメだよ」

次郎 1 「そうか。そうかもな」

香織 1 「いやいや。全然構わないですから」

次郎 1 「ただでさえ世話になってるのに、運まで使わせて」

香織 1 「…もう決めましたから」

省吾 1 「サイコロの目が出る確率は $1/6$ だ。当然 1 が出る確率も $1/6$ だね」

由佳 1、黙っている。

省吾 1 「…ただ、ここで言われてる確率 $1/6$ は、6 回サイコロ振ったら、1 回は 1 が出るって保

証してるわけじゃない。サイコロを振る回数をどんどん増やしていくと、だいたい平均して 6 回に 1 回くらいの割合で 1 が出るよ、って言うてるだけだ。これが大数の法則。…それは時間無制限で、無限にサイコロが振られることを想定してる。つまり、サイコロを 5 回振って一度も 1 が出なかったからといって、6 回目に 1 の目が出る確率は、過去 5 回と全く変わらない。なぜなら、サイコロ自体は過去 5 回に振られた時、自分がどんな目を出したのか覚えていないから」

吉田 1 「お前、こないだキシリトールに支配されてるって言ってなかったっけ？」

橋本 1 「それは昔の話」

吉田 1 「あ、そうなんだ」

橋本 1 「とっくに解放された」

吉田 1 「…おめでと」

橋本 1 「解放されるのが嬉しいとは限らないんだわ」

吉田 1 「割と複雑なんだな」

橋本 1 「むしろ寂しいこともある」

吉田 1 「…でもさ。それじゃあ。13 からも早々に解放されるんじゃないの」

橋本 1 「そうかもしれない」

吉田 1 「バカ。じゃあ彫るんじゃねえよ」

橋本 1 「むしろ逆だ。支配されてたことを覚えておきたいんだわ」

吉田 1 「なにそれ？ やめとけよ」

省吾 1 「サイコロは 1 回ごとに新鮮な気持ちで 6 回目を転がる。ということは、過去 5 回の結果は 6 回目のサイコロにまったく影響を及ぼさない。サイコロに過去はない。サイコロにとっては、いま現在、その時に振られる 1 回しか存在しない。…新しくサイコロが振られる。それはサイコロにとって、新しい世界が立ち上がるのと同じだ。そこで振られる 1 回 1 回はまったく別の新しい世界で、その世界同士は完全に等価だ」

香織 1 「顔が好きです。だからこの人」

秀人 1 「身も蓋もないね」

香織 1 「顔は人ですから。…自転車は人が漕ぎますからね」

秀人 1 「まあ、そうかもしれないけどね」

香織 1 「ダメですか？」

次郎 1 「正直でいい。それ書いといて」

香織 1 「はい」

香織 1、マークシートに書き込んで、自動券売機へ。

省吾 1「これは、運についても同じことだと思うんだ。つまりさ、1回前の機会に運を使わなかったからといって、次の機会に運が手元にあるとは限らない。もし運があるのであれば、あるときに使わないと失われる。そして、失った運は二度と取り戻せない。だってそれは、別の世界のものだから」

由佳 1「…あなたって、普段からそんなこと考えてるの」

省吾 1「いつもではないけど、たまに」

由佳 1「…なんか、全然知らない人みたい」

由佳 1、途方に暮れてその場に座ったまま。

省吾 1、新しいマークシートを取りに、テーブルへ歩いていく。

携帯見ていた光希 1、紀子 1の肩をたたく。

光希 1「連絡きた」

紀子 1「処理していいって？」

光希 1「うん」

紀子 1「じゃあ行こう」

光希 1「競馬は…3階か」

紀子 1「うん。エレベーターで行こう」

光希 1と紀子 1、場内から出ていき、エレベーターの前へ。

橋本 1「明日仕事抜けるから、よろしく」

吉田 1「え？ お前、仕事休んで彫りに行くの？」

橋本 1「もう予約したわ」

吉田 1「バカじゃねえの」

橋本 1「俺にとっては大事なことなんだわ」

橋本 1「…勝手にしろよもう」

吉田 1、タバコの火を消す。

吉田 1「俺、ちょっと2階見てくる」

橋本1 「ああ。うん」

吉田1 「お前どうする？」

橋本1 「俺はいい」

吉田1 「じゃ、後でな」

吉田1、受付の前をとおって場内から出ていく。会場出てすぐの階段を上っていく。

吉田1が階段を上るうちに、観客たちの配置が変わる。光希1と紀子1はいなくなる。

席替えのように、場内の人々が再編成される。

part2 : 2階-ボートピア福島

吉田1、階段を2階に上がって場内へ。

平日の午後で、客足はまばら。係員A、B、Cが場内を巡回している。

手足の不自由な橋本2の代わりに、次郎2がマークシートに記入している。

橋本2 「1」

次郎2 「1ね」

橋本2 「あと3」

次郎2 「はいはい。1と3ね」

橋本2 「あと13」

次郎2 「はいはい13ね。1と3と13」

橋本2 「うん」

吉田1、橋本2と次郎2の前を通る。そのまま歩いてく。

次郎2 「…あれ？ じいちゃん。これ、1313で13が2個になってるよ？」

橋本2 「うん。13の繰り返し」

次郎2 「13好きなの？」

橋本2 「うん。俺のラッキーナンバーだから」

次郎2 「だったらさ。1と3だけとか、13だけでも買えるけど」

橋本2 「いい。繰り返しでいい」

吉田1、モニターを眺める。やってきて、その隣に立つ、秀人2と由佳2。

秀人2 「どうも」
由佳2 「こんにちは」
吉田1 「よく会いますね」
秀人2 「ここに来るとなにかやってるからね。つついね」
由佳2 「かよっちゃうよね」
吉田1 「わかります」
秀人2 「でも兄ちゃん、ほんとよく来てるよね」
由佳2 「なにしてる人なの？ プロ？」
吉田1 「(笑って) プロじゃないですよ」
由佳2 「そっか。それっぽいから。なんていうか、たたずまいが」
吉田1 「やめてくださいよ」

受付2 (場内アナウンス) 「常滑ボート第11レース。投票券の締め切り時刻は16時13分となっております。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけれられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

省吾2、壁際にある自動券売機で、的中券の払い戻しをする。
札を数ながら、椅子に座っている香織2のもとへ。香織2に札を渡す。

省吾2 「お前のアドバイス、冴えてるな。二連チャン」
香織2 「(札を受け取り数える) 数字とかでごちゃごちゃやってるからダメなんだよ」
省吾2 「お前なに見てんの？」
香織2 「顔だよ。顔。顔見りゃだいたいわかんでしょ」
省吾2 「顔？」
香織2 「まくり差しで決める男は顔がいいんだよ」
省吾2 「顔ねえ」
香織2 「スッとしてるっていうかさ。決めますって感じで」
省吾2 「ふうん。決めますねえ」

吉田1 「お二人は？もしかしてプロなんですか？」
秀人2 「まさか」
由佳2 「食ってけなくはないけどね」
吉田1 「うそ」
由佳2 「ほんと」

吉田1 「プロ並み？」

秀人2 「実はコイツが数字に強くてさ。…コイツ、保険会社で、数理士の仕事してんのよ」

吉田1 「数理士？」

秀人2 「あれだよ。統計とって、リスク分析して、保険料計算したりする」

吉田1 「ああ。なんていうか、それ系の…」

秀人2 「あんまり当たるもんだから、俺が口実作って会社抜けさせてんだよ」

由佳2 「お得意さんだから。この人の会社」

吉田1 「数字的なコツがあるんですか？」

秀人2 「ベイズ推定」

吉田1 「は？」

秀人2 「ってのを使うんだと」

吉田1 「ベイズ？」

橋本2 「お前、ちゃんと働いてるのか？」

次郎2 「なんで？」

橋本2 「最近な、いつもいつも連れて来てくれるだろ？」

次郎2 「じいちゃんがさ、家で暇そうだから。…ここだと、来ればなにかやってるし」

橋本2 「嬉しいんだけどな。心配になってきたよ」

次郎2 「大丈夫だから」

橋本2 「…もしかして、仕事クビになったのか？」

次郎2 「やめてよ」

橋本2 「どうなんだ？」

次郎2 「仕事は大丈夫だよ」

橋本2 「怒らないから言ってみろ」

由佳2 「ベイズってのはね。

前もって広くデータが取れない、要は、すごく起きにくいことを推論する方法ね」

吉田1 「はあ…？」

由佳2 「だいたいはね。パラメータとか、仮説の不確実性を確率で示してさ、推論するわけ」

吉田1 「えーと…」

由佳2 「なんていうかね。頻度論はデータをもとに確率を導き出すんだけど。

ベイズ推定はね。もっと、ありえないことが起こる確率を予測するのに便利なのね。

これは確率ってものを現象として捉えるか、観測者の主観として捉えるかの違いね」

吉田1 「えーっと、その。なんていうかですね…」

由佳2 「あ、そうだ。ちなみに頻度論ってのはね。

サイコロ振り続けると、目が出る確率が1/6に限りなく近づいていくあれね」

吉田1 「すみません。全然わかんないす…」

香織2 「あんたはダメな顔だ」

省吾2 「なんだよ。いきなり、ケチつけて」

香織2 「最終コーナーで持ってかれそう（笑う）」

省吾2 「うるせーよ」

香織2 「だってそういう顔してんだもん」

省吾2 「いいんだよ。別に。レースでないんだから」

香織2 「うわー。負け惜しみ」

省吾2 「なんとでも言え」

香織2 「顔は変えられないもんね」

省吾2 「おい！ そういうお前は？ お前どうなんだ？」

香織2 「あ？ そういうこと言っちゃう？ 言っちゃうんだ？」

省吾2 「わ。なんだよメンドクセーな」

香織2 「めんどくさいって言ったー。この人私のことめんどくさいって言ったー」

省吾2 「底なしにめんどくせえな」

香織2 「泥沼って言ったー。この人私のこと」

省吾2 「泥沼じゃなくて底なしだよ」

秀人2 「とにかくあれだ。予測できなさそうなことも、実は数学的に予測できるわけ」

吉田1 「はあ」

由佳2 「ちなみに、ラスムッセン報告ってのがあってね。これはベイズ推定を使って…」

吉田1 「あ、大丈夫大丈夫。そういうの、もう大丈夫です」

由佳2 「そう？」

吉田1 「聞いてもわかんないんで」

秀人2 「つまりさ。要するに、俺たちは知らず知らずのうちに、数字に支配されてるわけだ」

由佳2 「まあそうだよね」

秀人2 「ただし、数字の秘密を知れば、逆に俺たちは数字を支配できる」

吉田1 「…いまいちピンとこないっすけどね」

秀人2 「実践すればわかるかもよ」

吉田1 「え？」

次郎2 「…クビになった」

橋本2 「なにしたんだ？」

次郎2「これ」

橋本2、腕をまくって見せる。肩にタトゥーが彫ってある。

橋本2「刺青なんか彫ったのか」

次郎2「タトゥーだよ。これ見つかって、辞めろって…」

橋本2「なんで彫った？」

次郎2「なんか気分変えたかったんだよ」

橋本2「寝ぼけたこと言うな。彫ったところでお前はお前だろうが」

次郎2「いいだろ別に。その時はそう思ったんだよ」

橋本2「なんだこれ？ なんて書いてあるんだ？」

次郎2「まだ途中だよ」

橋本2「なんて書こうとしてるんだ？」

由佳2「でもこれ、ホントに当たるから気をつけてね」

秀人2「やばいやつだから」

由佳2「真実ってのは大抵やばいからね」

吉田1「なんか急に気になってきたな」

秀人2「でも、ここだと聞かれるから、ちょっと別のとこいこ」

吉田1「別のとこ？」

由佳2「うん。…喫煙所、いま誰もいないよ」

秀人2「そこにするか。いこっか」

すると3人のもとに、係員A、B、Cがやってくる。

秀人2「なに？」

係員A「またあんたらか」

由佳2「どうしたの？」

係員B「お前ら、コーチ行為しようとしてるだろ？」

由佳2「なに？ なんのこと？」

秀人2「いやあ…ちょっとなに言ってるかわかんない」

係員A「懲りないなあ。コーチ屋は違法なんだよ。知ってるでしょ？」

秀人2「いやいや。ちょっと世間話してただけだって」

由佳2「そうだよ。っていうか、そもそもコーチ屋ってなに？ バッグかなんかのブランド？」

秀人2「コーチ屋のバッグって、なんかバッタもんぼいな」

由佳2 「わたしやだ。そんなバッグ欲しくない」
吉田1 「コーチ屋？」
係員C 「そうだよ。あんた、カモにされてんだよ」
吉田1 「俺が？」
秀人2 「なに変なこと言ってんだよ」
吉田1 「この人たち、そうなんですか？」
由佳2 「違うよ」
秀人2 「勘違いだって」
由佳2 「失礼だなあ…」
秀人2 「本当になあ…」

秀人2 と由佳2、ブツブツ言いつつ、さっさと場内から出て行く。
係員A と B、秀人2 と由佳2 の後をついていく。

香織2 「…確かに底なしだよな」
省吾2 「なにが？」
香織2 「…こんな生活、このまま続けててもさ」
省吾2 「大丈夫だよ。そのうち俺がなんとかするから」
香織2 「ホントかなあ」
省吾2 「大丈夫大丈夫。大丈夫だって」
香織2 「…あーあ。誰もわたしのこと知らないところに行きたい」
省吾2 「なんで？」
香織2 「…人生やり直したい」
省吾2 「場所変えたくらいじゃ、お前の人生変わんないって」
香織2 「…どっか遠いところに行きたいなあ」

係員C 「あんたも気をつけなよ」
吉田1 「あの…ベイズ推定は？」
係員C 「は？」
吉田1 「ラスムッセン報告は？」
係員C 「なにそれ？」
吉田1 「全部嘘？ それとも本当の話ですか？」
係員C 「…自分で調べたら？」
吉田1 「あ…。はい」

吉田 1、その場で途方に暮れている。係員 C レシーバーを出して、

係員 C 「あー 3 階？ あれ？ こちら 2 階。こちら 2 階ですが。

あれ？ 聞こえてます？ 応答願います。もしもし。もしもし。もしもし…」

係員 C がレシーバーに問いかけている間に、観客たちの配置が変わる。

光希 1 と紀子 1 が場内に入って配置につく。席替えのように、場内の人々が再編成される。

Part 3 : 3 階・ニュートラック福島

係員 α、レシーバー取る。

係員 α 「はいはい 3 階です。…はい 3 階。…またあいつら？ はいはい。懲りないなあ。はい」

係員 α、レシーバー切って、場内を回り始める。係員 β、γ と合流して場内を巡回する。

香織 3 に付き添っている省吾 3 と由佳 3。3 人、座ってモニターを見ている。

香織 3 「やっぱりね。気持ちだけは大きくいきたいもんだね」

由佳 3 「大穴ですか？」

香織 3 「うん。そうさね。…当たると一番大きいのはどれだい？」

省吾 3 「三連単で 1313 倍ってのが一番かな？」

由佳 3 「…2・4・7 の三連単ですね」

香織 3 「じゃあ、それにしよう」

省吾 3 「2 と 4 と 7 だね」

省吾 3、手足の不自由な香織 3 の代わりに、マークシートへ記入を始める。

紀子 1、香織 3 たちの様子を伺っている。場内を見回っていた光希 1、紀子 1 の肩たたき、

光希 1 「どうする？」

紀子 1 「まだ待って」

光希 1 「でも」

紀子 1 「もうちょっと」

香織 3 「ほんとは自分で全部できたらいいんだけどね」

省吾 3 「気にしないでよ」

香織 3 「…手も足も悪いし、頭もこんな調子で」

由佳 3 「頭はしっかりなさってるでしょ？」

香織 3 「そう言ってくれるのはありがたいけど、覚えた先から抜けてっちゃうからね」

由佳 3 「でも、馬のことはよく覚えてらっしゃいますね」

香織 3 「それは好きだからね」

秀人 3 と橋本 3、喫煙所から出てくる。係員 α 、 β 、 γ と鉢合わせになる。

係員 γ 、秀人 3 に気づく。瀬戸 3 も気づいて手を挙げる。

秀人 3 「ご苦労さん」

係員 γ 「なに？ 非番なのに来てんの？」

秀人 3 「今日、俺金運がいい日だから。稼いどかないと」

係員 γ 「ほんと好きだなあ」

秀人 3 「お前もやってけば？」

係員 γ 「バカ、工作中だ」

秀人 3 「手数料安くしとくよ」

係員 γ 「アホ。職員がノミ屋みたいなことして」

秀人 3 「真面目だなあ」

係員たちと秀人 3、橋本 3、手を挙げて別れる。

受付 3 (場内アナウンス) 「盛岡競馬第 12 レース。投票券締め切り 5 分前になりました。投票される方はお早めに自動券売機にてお買い求めください。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけれられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

省吾 3 「いくらにする？」

香織 3 「今日はもう最後のレースだったね？」

省吾 3 「うん。そうだよ」

香織 3 「じゃあ、あるだけ賭けちゃおうか？」

省吾 3 「いいの？」

香織 3 「いいよ」

由佳 3 「本当にそれでいいんですか？」

香織 3 「せっかくだからね」

由佳3、バッグから封筒を出して、封筒ごと省吾3に渡す。

省吾3、札を数える。札を封筒に入れて、自分の上着のポケットへ。

省吾3「じゃあ、ばあちゃん。5万円、確かに受けとったからね」

香織3「それだけだったかい？」

省吾3「うん。ばあちゃんも数えてみる？」

香織3「いいよ。お前に任せてるから」

省吾3と由佳3、顔を見合わせる。

次郎3と吉田2、それぞれ自動券売機で投票権買って、受け取る。席に戻りながら、

次郎3「それでアイツ。俺の名前、タトゥーに彫っちゃってさ」

吉田2「ウソ？ それシールじゃなくて？」

次郎3「ないない。俺も確認した。ガッツリ彫ってたよ」

吉田2「うわー、本気のやつだ」

次郎3「(肩を見せて) ここんとこにローマ字で。JIRO、ジローって」

吉田2「うひゃー」

次郎3「さすがにそれ見たら、俺もう収めるしかないなって思ってさ」

吉田2「え？ 結婚すんの？」

次郎3「たぶん、そうなると思う」

吉田2「うひゃー」

次郎3「あいつバカだから心配になっちゃって。だって名前彫るってさ。いくらなんでも…」

吉田2「なんだ。幸せものじゃねえか」

省吾3「じゃあ、行ってくるね」

省吾3、立ち上がる。

紀子1と光希1、早足でやってきて、省吾3の前に立ちはだかる。

省吾3「なんですか？」

紀子1「失礼します」

省吾3「すみません。いま急いでるんですが？」

光希1「…わたしたち、実は法律事務所のものでして」

紀子1「調査員です」

省吾3 「なんの用？」

紀子1 「すいませんが、ここを動かないでいただけますか？」

由佳3 「なんですか？ ぶしつけな」

光希1 「申し訳ありません」

次郎3 「しかし、お年寄りを騙すのはよくないですね」

受付3 (場内アナウンス)「盛岡競馬第12レース。投票券締め切り1分前になりました。投票される方はお早めに自動券売機にてお買い求めください。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つげられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

マークシートに記入していた橋本3と秀人3、慌てて自動券売機へ。

紀子1 「僭越ながら、わたしたち調査いたしました」

光希1 「(香織を示し) そちらの方のご息が私どものクライアントでして」

香織3 「…あのバカ息子がなんだって？」

紀子1 「財産を騙し取られているのではないかと危惧されておりました」

香織3 「誰が騙されてるって？」

省吾3 「大丈夫。ばあちゃんは大丈夫だから」

吉田2 「…あれ？ でも、あれだな。その話どっかで聞いたな」

次郎3 「なに？」

吉田2 「女が男の名前、タトゥーで彫ったって話」

次郎3 「誰だよ？ その話してたの？」

吉田2 「ん？ …ちょっと待って。思い出すから」

次郎3 「誰？」

(場内のサイレンが鳴って、すべてのモニターが点滅する。「投票締め切り」の文字)
観客たちが一切にモニターを見る。

受付3 (場内アナウンス)「盛岡競馬第12レース。投票を締め切らせていただきました。なお、当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つげられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

モニターの向こうで、出走準備が始まる。

香織 3 「…次のレース、買えなかったのかい？」

省吾 3 「うん。ごめん」

香織 3 「そうかい。…残念だね」

紀子 1 「失礼ですが、あなたは賭け金を着服されていたんですよ」

光希 1 「それも、今日だけじゃありません」

紀子 1 「合計だとかなりの金額になります」

香織 3 「…偉そうに。そんなことは、とっくに知ってたよ」

香織 3、省吾 3、紀子 1、光希 1、黙る。

秀人 3 「まずは血だろ？」

橋本 3 「血統は見てるよ俺も」

秀人 3 「じゃあ、後は、馬の面見りゃわかるだろうがよ」

橋本 3 「いや。馬体も面もいいと思ったよ」

秀人 3 「お前の買ったやつ、俺はいいと思わないな」

橋本 3 「そこは好き好きだから」

秀人 3 「お前さ。名前に引っ張られてんじゃないの？」

橋本 3 「確かに。それはちょっと、あるかもなあ」

秀人 3 「ダメだよ。名前は参考になんねえよ」

橋本 3 「でもなあ。勝つ馬は名前もいいんじゃないの？」

秀人 3 「さっき勝った馬、ムラタキシリトールだぞ？ 勝ちそうな名前か？」

橋本 3 「いや。スツとしそうだけど。名前だけだったら買わねえな」

秀人 3 「だろ？ 名前は都合で変わるんだよ。馬の体は変えられねえだろ」

橋本 3 「そうだけどさ」

秀人 3 「馬だけ見てりゃいいんだよ。馬が走るんだから」

香織 3 「お駄賃みたいなもんだよ。この人たちはここまで連れてきてくれるからね」

紀子 1 「しかし」

香織 3 「礼儀もわきまえてるし、わたしに優しいからね」

省吾 3 「ばあちゃん…」

光希 1 「いや、だからと言って」

由佳 3 「でも、おばあちゃん、大穴を当ててみたいって」

香織3 「それはね、別にお金が欲しいわけじゃないんだよ」

吉田2 「…そっか。信治郎だ」

次郎3 「え？」

吉田2 「あの。ホラ、藤森さんの現場についてるヤツ」

次郎3 「…ああ。いたね、そんなやつ」

吉田2 「そいつの女が、やっぱり腕に信治郎の名前入れようとしてて」

次郎3 「ふうん…」

吉田2 「でも、信治郎のヤツさ。女が彫ってる途中の状態で見つけて。

まだ腕にローマ字で『JIRO』ってしか彫ってなくてさ。それでちょっと揉めて」

次郎3 「…お前、その女の名前知ってる？」

吉田2 「え？ …あ。そういうことか」

次郎3 「教えてよ」

香織3 「…ありえないって言われることが起きるところ、わたしはそれが見たいだけなんだ」

省吾3 「ありえないこと？」

香織3 「そうだよ。ありえないことが起きるのはワクワクするじゃないか。誰も勝つのを信じていないような馬が勝つなんてね。…それこそ、わたしだけしか信じていないような馬がね」

由佳3 「…それだけ？」

香織3 「それだけだよ。お金じゃない。くれてやるよ。大切なのはそのあいだの時間なんだ」

省吾3 「あいだ？」

香織3 「そうさ。馬に賭けてからの時間。レースが終わるまでのあいだ。そのあいだは、ありえないことが起きるかもしれないって想像できるじゃないか。…起きないかもしれない。でも起きないとは誰も言えないからね。レースの間は、その、どっちもある時間なんだ」

モニターの前にわらわらと観客たちが集まり始める。

香織3 「わたしはね。そのレースの間にね。思うんだ。このレースの後に、わたしは別のものになってるんじゃないかって。わたしはわたしのまんまなんだけど、何か別の世界にいるようなものにね。…もしかしたら、なにか本当にありえないことが起きて、わたしは、わたしから解放されるんじゃないかってね」

モニターの向こうで、レースが始まる。

数名の観客が拍手する。「いけー！」と歓声上がる。

香織3「…バカみたいかもしれないけどね。本気で思ったりするんだよ。どんどん忘れていくばかりの、この、わたしからね。解放されるんじゃないかって。…大好きだった周りの人がすっかりいなくなってしまう。…一人だけ。こうやって。残ってしまった」

香織3、黙ったままの省吾3、由佳3、紀子1、光希1を見る。

香織3、展望テラスを見て、

香織3「ちょっと風に当たりたいね」

由佳3「…あ、テラス。はい」

省吾3「うん。こっち持つからね」

由佳3と省吾3が香織3を抱え上げる。

香織3を展望テラスの外に連れて行く。テラスの椅子に座らせる。

香織3、椅子に座って、外の景色を眺める。

足元の国道4号線が走り、ずっと遠くにかすんだ山の稜線が見える。

香織3「ああ。そうか。ここからも磐梯山と安達太良山は見えるんだね」

壁に備え付けられた、または天井から吊るされた多数のモニターを見つめている観客たち。

レースの様子が中継されている。

観客たち「お、きた」「させー！」「ありゃダメだ」「そのまま。そのまま！」「出てくんない！」

歓声が上がり、モニターの向こうで、レースが終わる。

観客たち、投票権を破る・喫煙所にタバコを吸いに行く・椅子に座って新聞を覗き込む・次のレースのマークシートを記入する…等々。

係員たちが場内を巡回している。

香織3「いい天気だね」

香織3、テラスからの景色を眺めている。